

安 あん

全 ぜん

は

楽しい活動の第一歩

~事故^{ゼロ}0を目指して~

楽しい活動は「安全」という土台があってはじめて成り立ちます。安全に楽しく活動するためには、どのような活動でこういった事故やけがが起きやすいのかを理解し、そのための対策をあらかじめ考え、準備しておく必要があります。

けがをしやすい活動 ワースト3(春~夏)

平成30年度「傷病調査」(上半期)集計結果(速報値)

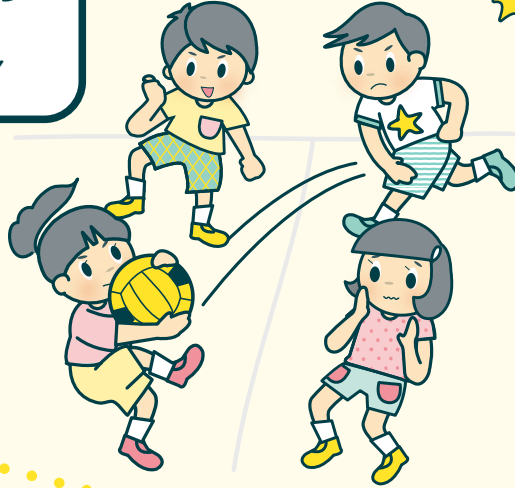
1位 スポーツ活動 (151件)

《けがの種類》

打撲……………22.5%
ねんざ……………18.5%
虫刺され……………14.6%

《けがをした状況》

- ボールをよけた時に人とぶつかり、バランスを崩して転倒、後頭部を強打。
- 走っている時に足首をひねり、ねんざ。



2位 野外炊事 (110件)

《けがの種類》

やけど……………40.0%
きり傷……………20.0%
虫刺され……………13.6%



《けがをした状況》

- 鍋のふたの取っ手を素手でつかんでしまい、やけど。
- 薪を押さえていた手にナタが当たり、人差し指を切った。

3位 登山・ハイキング (80件)

《けがの種類》

虫刺され……………32.5%
ねんざ……………22.5%
打撲……………12.5%

《けがをした状況》

- 下山後、足首についたマダニを発見。
- 下山中、足場の悪いところで足をひねり、ねんざ。

活動中の事故やけがを予防するためには？(春~夏)

スポーツ活動では

- 運動前にウォーミングアップとストレッチ(特に脚)をしっかりしておく。
- 周りをよく見ながら動くようにする。



野外炊事では

- 軍手、長袖、長ズボンなど野外炊事に適した服装をする。
- 包丁やナタの使い方を説明するだけでなく、誤った持ち方や動かし方などを実際に見せながら、どうしたら手を切ってしまうのかを分かりやすく説明する。



登山・ハイキングでは

- 帽子、長袖、長ズボン、手袋、足首を覆う靴下の着用など、登山・ハイキングに適した服装をする。
- マダニなどの侵入を防ぐため、シャツの裾はズボンの中に入れるようにする。
- 適宜休憩を取るようにし、足場が悪いところは注意しながら歩くように声をかけるようにする。



Attention!

思わぬ事故や
けがに注意!

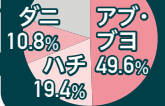


- ❗ 自由時間にベッドで遊んでいて転落(腕の骨折)
- ❗ ガラス戸に気づかず入ろうとして顔面を強打(歯の破折)
- ❗ 入浴中にふざけて熱湯をかけてしまい、やけど(上半身・太腿にⅡ度の熱傷)
- ❗ 地図を見ながら歩いていて側溝にはまり、足を強打(下腿の裂傷)
- ❗ 階段を飛び降りて着地に失敗し、足をくじく(足首のねんざ)

けがに注意!!

体験活動中の

虫の種類



1位 虫刺され (168件)

- 《けがをしたところ》《けがの要因》
- 下腿……21.7% ■ 虫・動物(環境)
 - 足首……14.6% ■ 不適切な服装(装備)
 - 手・指……13.4% ■ 不注意(本人)

青少年教育施設で起きたけがワースト3(春~夏)

平成30年度「傷病調査」(上半期)集計結果(速報値)

3位 ねんざ (114件)

- 《けがをしたところ》
- 足首……74.8%
 - 足・指……9.0%
 - 手首……7.2%

- 《けがの要因》
- 不注意(本人)
 - 不慣れた活動(本人)
 - 不安定さ・滑りやすさ(環境)

ねんざ

12.7%

打撲

16.9%

虫刺され
18.8%

2位 打撲 (151件)

- 《けがをしたところ》
- 頭……28.4%
 - 顔……10.8%
 - 手・指、膝、足・指……9.5%

- 《けがの要因》
- 不注意(本人)
 - 注意不足(指導・引率者)
 - 失敗、不慣れた活動(本人)

安全で楽しく活動するために

体験活動には、思わぬ事故や大きなけがが発生するリスクがあります。体験活動の指導者は、活動の指導や支援を行うだけでなく、子供たちが安全に活動できる環境づくりにも配慮することが大切です。

安全管理の3つのポイント

01 計画段階では見落としがないようにできるだけ多くの危険を洗い出し、活動中も危険の発見・把握に努めながら、状況に応じて適切な安全対策を講じるようにしましょう。

02 指導者間で想定される危険や安全対策の情報を共有するとともに、事故が起きた時の対応や手順の確認などを行い、子供たちの安全を確保できる体制づくりを行うようにしましょう。

03 子供たちには、安全に関するセーフティークを行うなど、「自分の身の安全は自分で守る」という意識を持たせるようにしましょう。

安全と危険のバランスを考える

「安全を意識し過ぎる」ことにも注意が必要です。

過度に活動を制限したり、禁止したりすると、子供たちの活動に対する満足度が低下するだけでなく、安全に対する自主性や主体性をはぐくむ機会も失われ、活動の教育効果が薄れてしまうことにもなりかねません。

指導者は、想定されるリスクを自分たちの許容範囲に抑えつつ、過剰な安全管理にならないように安全と危険のバランスを考えながら活動することが大切です。

✓ 活動前のチェックリスト

- 活動場所で危ないところがないか、使用する用具に破損がないかなどを点検しましたか?
- 気象情報(天気、気温、湿度、風など)を確認しましたか?
- スタッフ間で情報共有(子供の人数や特性、役割分担、配置、禁止事項、緊急時の対応など)はできていますか?
- 子供たちは活動に適した服装(帽子、長袖、長ズボン、軍手など)をしていますか? また、持ち物も確認しましたか?
- 体の調子が悪い子供や気分がすぐれない子供はいないか、活動前に確認しましたか?
- セーフティーク(安全指導)を行いましたか?

事故0

事故を起こさないために

想定外の事故やけがを起こさないために最も気をつけなければならないのは、「隠れた危険(危険の見落とし)」がないようにすることです。

「ちょっと気になることがある」、「ちょっと不安がある」といった状態で活動することは事故の元になります。そのような時、場合によっては、活動の中止を判断する「やめる勇気」を持つことも大切です。